

---

# パラレルワールド

将軍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パラレルワールド

### 【Nコード】

N0872N

### 【作者名】

將軍

### 【あらすじ】

その世界に無縁だったはずの少年と少女は、否応なくそちらの世界に引き込まれ、自分の居場所を探すことになる。

## 登場人物紹介

### 登場人物

#### 烈火信仁

話の主人公、普通の中学生最近の自分のことで悩んでいる。美紀に昔、あることをされそれがトラウマになっている。

#### 西枝美紀

信仁の幼馴染、スポーツ万能で成績優秀いつも信仁をからかっている。最近占いにハマっている。信仁をトラウマにさせた張本人だが本人は全く気付いていない。

#### 烈火忠勝

巨大な体をもつ信仁の父親、外見からは怖そうに見えるがじつは優しい性格で力仕事が得意。

#### パラレル

最近できた占い館『パラレル』の店主、自称1000歳悟った占いは必ず当たる。

## プロローグ

1414年 イギリスのある町で裁判が行われた、占い師が魔力で自分の恋人を殺したとある女が訴えたのである。裁判所は女の訴えを受け入れ占い師を邪悪な魔女として絞首刑の判決を下した。占い師は最後まで無罪を主張したが受け入れられなかった。処刑台に上がった彼女は最後にこう言い放った。「裁判所がそう判決を下したなら私は従いましょう、しかし私を訴えた人に伝えてください貴方は永遠に地獄の苦しみを味わうことになる。また私は今から600年後によみがえります。」

その場にいた人は占い師を散々馬鹿にし死刑台の上にあげた、そして縄がゆっくり女の首に掛けられた……。今となつてはこの人物に関する資料はほとんど無い、ただ占い師の名前が「セレナ」だということを除いて。……

## 平凡な終わりと異常な始まり

「みーつけた！」広い公園に女の子の声が響く、「信仁弱いも  
う三度目だよ？下手すぎない？」「うっせえ、そうゆうお前だつて  
同じようなもんだろう！」「信仁照れてるー」「うるさい！」彼女  
はいつもこうだ、小さい頃からの幼馴染だが体は大きくなって中  
身はちつとも変つてない。「悔しかったら捕まえてごらん」。本  
当に女のくせに男勝りなやつで幼いころから数多くの武勇伝を作り  
上げている。「本当に元気だな。」いつの間にかきていたのか大男が  
立っていた、その巨体に比べて優しい目をしているこの男はなにを  
隠そうおれの父親だ。

「親父！近くに來ているんなら声ぐらいかけろよ。」「そんな人の  
勝手だろうがお前が口出すもんじゃない。」ム力つくが今は親  
父にはかなわない、話を変えることにした。「親父は仕事の方はどう  
なんだよ、またクビになつたんじゃないか？」親父の顔が渋  
くなつた、おやじは体は巨体で力仕事には向いているのだが、今は  
事務的な会社に勤めている、不器用な方なのでもう3回もクビにさ  
れている。

「そう言つお前こそテストはどうだつたんだ？」にやにやしなから  
親父が反撃してきた。「お前は俺よりやばいんじゃないのか？体力で  
も学力でもあの子に負けてるしな。」親父の執拗な反撃が続く。「特  
に爆笑できるのが小学生のときだな、お前がシヨンベンしてる時に  
あの子が見ててお前のあそこは自分にないから偽物だと言って・・・

「ウガー！」親父を追っかけまわしたが捕まえられるはずも  
なく数分であきらめた、まったく最近の俺と来たら！ 気がつく  
となみだができていた。

「お帰りなさい。」家では母さんが既に夕飯をつくつて待っていた、  
さつきからの出来事で気分が悪くてとても食べられる気分じゃない  
が明日までに餓死したら困る。仕方なく食べることにした。「信仁、

またお父さんとなにか話してたんでしょ。「びつくりして思わず箸を落としてしまった」そのくらいお見通しよ、お母さんは何でも知っているんだからね。「母さんは自分のことを必ず「お母さん」と呼ぶもう息子が中三なんだから 呼び方を変えてもいいと思うが毎回この調子だ。「そのどこが悪いんだよ!」母さんにたいして反論した、おれの悪いくせは拒否されると必ず反論してしまう事だる「当たり前よ!仕事もロクにしないで飛び回っているあんな男と会っちゃいけません!」母さんの悪口をこれ以上聞く気にもなれず「ごちそうさま。」と言って二階に上がった「まだご飯たべてないでしょ!」。「下から母さんの声が聞こえたが無視した」「はああく溜息をつけてベットに寝転がった、毎日がこんな調子であしたもこうなるのかと思うと嫌になってくる。だがこれも仕方ないことだと思いい目を閉じた、そんなに眠れないと思っていたが10分もたたないうち深い眠りにおちていった。

今朝はずいぶん早く起きてしまった、時計を見るとまだ5時時ぐらいだった。今からではどうせ眠れないのでジョギングすることにした。体力をつけようと思って

始めたのだが今では一か月に三回程度しかやっていない、今日は休みなのでゆつくりと景色を眺めながら走ろうと思ったのだが・・・。「信仁くなにがんばってるのよ。」「信仁くなにがんばってきた西枝はスポーツに関しては積極的で俺とは全く違う。」

だからこうゆう時にはよく会ってしまうのである

ちなみに彼女の名前は西枝美紀、俺はたいがい西枝と呼ぶ。ともに名前を言い合う仲じゃないからな。

「うっせえな所詮おれは体力はありませんよ」だ。「一瞬西枝の顔

が険しくなつたがすぐもとの顔に戻つて行つた。「信仁きょうひま？」 彼女にしては珍しく人を誘つたので感心しながら答えた。「べつに暇だけどどっかいくの？」ニヤツとして西枝はある広告を見せたそこにはこんな風なことが書かれていた『占い館パラレル本日オープン、初回限定無料サービス。』「なにこれ？」西枝があきれ顔で言つた「見りやわかるでしょう、新しくできた占い館の広告よ。俺はつくづくその広告を見つめた」それで、その店に行きたいつての？」西枝は頷いた「そう私も始めて行くからちよつと心配なよね。」西枝「いつから占いに興味を持つようになった？しかも恋人と間違えられたら・・・つて何考えてんだ！」「分つたよとりあえず家に帰つて準備するよ、どこに行けばいい？」西枝はすこし考えて「わたしの家の前のバス停まできて。」と言つた「OK。」と答えおれは家に向かつて全力で走つた。

30分後俺は西枝の家の前のバス停にいた、小さい頃は無賃乗車して西枝と一緒に町中

まわつたがさすがに中学生ともなるとそんなことはしない、しかし家を出る時は大変だつた「テスト期間中は外に出ちゃいけません！」と母さんが猛反対したからだ、なんとか

図書館で勉強すると偽つて家を出たが大変だつた。

「信仁おまたせ」やつと西枝が出てきた・・・つて何だあの恰好は！上はお経が書き込まれた服をきて下は十字架の絵が描きこんであるズボンを履いている、「どうしたんだ？・・・その服装。」そう言うのがやつとだつた。「あ、これ？本調べてたらこの恰好で占い館に行くのが一番いいつて書いてあつたんで前々から準備してあつたの。」

俺はつくづくあきれ果てるしかなかった、彼女が占いに興味をもっているのは前から知っていたがここまでやるとはこりすぎだろう。意見を言う気も失せちようど来たバスに乗り込んで俺は占い館に向かつた。



## 占い師 パラレル

俺は西枝とは違って占いなどに興味はなかったので西枝を送ったらすぐ帰るつもりだったが占い館まできて唾然とした。「うそだろう?!」なんと今日始まったばかりだというのにお客が行列をつくっていた。

占いってこんなにブームだったけ? 「あら、あんたが知らなかっただけよ。最近では占いだけに一年で100万円かける人もいるんだつて。」おいおい、さすがに100万円はないだろうと思つたが、確かに最近家のポストにも、そんなたぐいのものが色々と来るようになっていた。なるほど俺が知らなかっただけで意外にブームなんだな占いって。

「それにしても混んでるな。これもお前が遅かつたからだぞ。」西枝をは涼しい顔をして「ふん、私達が来る前からすでにこの状態だったはずよ、確か朝の3時に開くんだから1時にはもう並んでるんじゃないかつたかな。」1時つて・・・もはやその占い師人間じゃないのではと思つたが聞くのはやめた。

「さて、おれは帰らせてもらうぞ。」やっと仕事が終わつたと思つて帰ろうとしたが

「ちよつと信仁、あんた送つただけで帰れると思つてんの。」後ろから西枝に呼び止められムカツときたが仕方なく戻つた「いったい何だつての」西枝はニヤツと笑つて目で周りを見ると合図した。周りを見てみると何やらカップルばかり、そのうえおれの方をじろじろ見ている人が多い。「私達をカップルだと思つていた人が多いのよ、それにここは2人1組じゃないと受けることが出来ないのよ。」つまり今帰ると、付近の人に変な目で見られるし俺が西枝と組まなければ占いを受けることが出来ない、そういうことになるんだな。「西枝は頷いた。こうなつたら仕方無い、親には午後までかかると言つてあるし付き合うしかないか、と気持ちを切り替えた、こ

の切り替えの早さは親父からの遺伝だろうがこれが長所でもあり短所でもある。

そうこうしている間には列は進んでいき、待つこと3時間半、太陽が真上に上って来たところにやっと番が回ってきた。「あーあ、やつとだな。」大きく伸びをしてさっさと中に入ろうとした俺を西枝が止めた「まって、ここでパレルル様に祈らなきゃ。」祈るってそれじゃまるで神様に祈るようじゃないか。「パレルル様、パレルル様、どうかわたしをお許してください」とこれだけ言って西枝はさっさと中に入っていた。

おいおい、あれがお祈りかよと思いつつ一応、おれも祈りをしてから中に入った。

仲は思っていたより明るく中央に2つのいすが用意されていた。西枝はもう座っている。

その正面には黒いローブをかぶった人影があった。

あれが「パレルル様」か、それにしても暗い人だなと思いつつ俺もイスに座った。

「何が聞きたいんだね。」パレルルの声が聞こえたので「いやそれは西枝に聞いてください」と答えるとパレルルは黙ってしまった。なんだよこいつと思っていたら急に西枝が

「はい、パレルル様にお伺いします。私は将来どんな女性になりますか。」俺には何も聞こえてこなかった、「そうだな、まず、これに名前を書いておくれ。」女なのだろう。

全身をローブで包んでいるため年はわからないが、若い女の声に聞こえた。

西枝がパレルルの差し出した紙に自分の名前を書いて差し出すとパレルルは、何やらぶ厚そうな本を取り出して紙と見比べながら何かを始めた。

「何してるんだらうね?」「水晶玉とか使うのが占い師じゃないのか?」おれの頭にあつた『占い師』はそれだった。「もしかしたら数秘術かも。」西枝はこういう専門的な事柄にはとても詳しい。『

数秘術つてのは古代ユダヤの人たちが考え出した占いの方法でね、対象となる人の名前や生年月日からその人の運命を予言するっていう話だけど・・・そんなの当てになるのかな？」名前や生年月日から運命が分かるって言うんならわざわざ、こんなところに来なくても自分の家で十分やれると思うのだが。来ている以上仕方ない。

「まさか！そんなバカな・・・」俺と西枝の会話はパラレルの突然大声で途切れた。

「どうしたんですか。パラレル様？」西枝が心配そうに呼びかけるがパラレルは上の空で聞こえていくかも怪しかった。

「セレナが、セレナが、セレナが・・・」セレナ？何のことかはわからないがとにかく起こさないといけない「しっかりしてください、パラレルさん！」必死にパラレルを揺ると、やっとパラレルは正気に戻ったらしく頭をあげてこつちを見た。驚いた、一瞬ロブの下の顔が見えたが若い女の人だ。普通占い師といったら中年のおばさんを想像しないか？。そんな事を思いつつ俺はパラレルに話しかけた。

「『セレナ』っていうのは誰なんですか？」俺の問いにパラレルはロブの奥から響くような声で答えた。

「セレナは、かつてイギリスの魔女裁判で死刑を宣告されて、絞首刑にされた女だよ。村の人間が『パラレル』とよばれておったそうじゃが。彼女は村の女の恋人の命を魔術で奪った魔女とした裁判にかけられた。そして裁判で死刑を宣告されたのだが・・・」

パラレルは中途半端の所で黙ってしまった。「そのセレナが何かをしたんですか？！」

西枝の声に押されるようにパラレルは話しはじめた「彼女、セレナは死ぬ前に二つの予言を残したのだよ。1つ目は自分を訴えたものは永遠に地獄の苦しみを味わうだろうという予言。2つ目は自分は600年後に蘇るといふ予言だった・・・」パラレルはそこで一息つき俺達をまっすぐ見た「その予言のうち、すでに1の予言は現実に起こっている。」 永遠に地獄の苦しみを味わうって・・・

いったいどんなばつのことをセレナは言ったのだろう？

「彼女を訴えた女が受けた呪い、それは永遠に生き続けるという呪いだっただのさ。」

逆にそれってラッキーじゃねえ？そう思って西枝を見ると西枝も不思議そうな顔をしている。

「それってラッキーなんじゃないかと思っっているね？」パラレルがおかしそうに言った

「なんでわかるんですか？！」西枝が驚いて言う「お前さんがたの顔を見ればわかるよ、ははははは！」　　パラレルはひとしきり笑った後で俺達に説明を始めた

「永遠に生きるということは、周りの人が死んで行っても自分は死ぬえないということなのさ、愛する人が年をとり死んでいっても、自分だけは残される。たとえ自分の国が滅びても自分は滅びることはない。たとえこの世の人類が全滅したとしても自分だけは生きつづける。彼女の苦しみは彼女に呪いをかけた張本人であるセレナが死ななければ解かれることはないのさ。」幕屋の中は冷房がかかっておらず、扇風機もないため、蒸し暑いはずなのだが、おれにはどうも肌寒く感じた。西枝に至っては微妙に震えているようにすら見える。

「あれ、でも、それっておかしくありません？」震えていた西枝がふと思いついたように言った「セレナさんは死刑にされたのでしょ？死刑台に上がる時にその予言をしたのだっただら呪いは無効になるんじゃないですか？」言われてみれば確かにその通りで

すでにセレナは死んでいるのだ、死ぬことにより呪いが解かれるなら、とつづくに呪いは解かれているはずである。「それはな……」パラレルが話したそうとしたその時「いつまで、パラレル様と話をしているのよ！」「後ろつかえてんだよ、早くしろ！」「外から男女の怒鳴り声が……そう言えば、まだ俺達の後に大勢いたんだっけ、

パラレルはやれやれという表情で肩をすくめ俺と西枝に一枚づづ名

刺を渡した。

「そこに書いてある住所が私のいるところだ、あんたさんたちには話したいことがまだあるし、私自身、お前たちのことを少し知りたいでね。また別の日にそこへおいで。」

パラレルは声をひそめてもう一つ付け加えた「裏口からおいき、外の人たちの恨みを買いたかないだろう?」「ありがとうございます。パラレル様!」西枝は嬉しそうにスキップしながら裏口から出て行った「ああ、言い忘れてたその男、名を何と叫ぶかな?」

パラレルは記憶力がないのかと思いつつながら俺は答えた「烈火信仁ですけど」パラレルは

頷きながら何かを俺に向かって投げた「うん?これは何ですか?」投げられたものをよく見てみると小さな袋のようだった「お守りだよ。何かあった時に役に立つ」中を開けてみると中には20個ほどのビー玉ぐらいの大きさの銀色をした鉄の球が入っていた「パラレル、これは……」言いかけて俺はパラレルが他の客の相手をしているのに気づき、聞くのはやめた、

そして西枝の後を追って裏口から外に出た。

**突然の襲撃と意外なお客 (前書き)**

遅れましてすいません。

ここから前書き書かせていただきます (汗)

ここから話は急展開を迎えます。

どうなるかはみてのおたのしみということでは

## 突然の襲撃と意外なお客

「信仁遅っそい！いつまで出てくるのに時間かけてるのよ」膨れた表情の西枝にいきさつを話すと、興味深そうに西枝は鉄の玉を手にとった。「パレル様が、信仁にね〜。」

さも、なんで私じゃないのよと言いたげな口調で話し続けながら西枝は鉄の球を回しながら見ていたが急にその手を止めた。「西枝、どうした？」俺の問いに西枝は鉄の玉の

一部分を指さすことで応じた。「そこに何があるって？」俺は西枝の指さした場所

鉄の玉の一部分を見つめた。「んん？何か書かれている……。」

西枝が指した場所

そこには何か文字が書かれているようだった。「なんだろう、この文字……」西枝は

袋の中を探って他の鉄の玉も調べはじめた。「信仁、これ一つ一つ文字が違うみたい！」

たしかによく見てみると、すべてを確認することはできないが一つ一つ文字は違うようだ

しかもよく見ると絵柄まで書かれている。「こつちが火、こつちが水、こつちが緑、これは巨人、これは壁……」美紀は絵柄を一つ一つ確認していく。記憶力からいえば

西枝の方が俺より数倍上だ、絵柄の確認を西枝がしている間に俺は文字をもう一度見つめた、明らかに英語などではない、母がいわゆる韓流な人なので韓国の文字であるハングルも見たことがあるが、それとも全く違う。中国や中東系の国の文字かもしれない、そう考えたとたん、絶対にそうと思えてきて、ますます調べたくなってきた。

「おい、西枝、図書館にいきこうぜ」俺の言葉に西枝は顔をあげ「うん、この絵柄はすべてわかったけど、文字がまだわかってないもん

ね。」

図書館に向けて歩きだそうとした俺だったが、ふと背中に誰かの視線を感じた。

「！！」振り向いたが誰もいない「気のせいか。」ほっとして前を向いたおれの眼に

黒いマントをはおった男の姿が映った！「だめだよ、油断しちゃ。」

黒いローブで全身をつつみ、黒いマントをはおり、仮面をかぶったその男、男の手には少し錆びついた小さなカマが握られている。

「うあああ！！」俺の悲鳴に西枝が反応して振り向いた、「信仁！！」西枝も男の手に

カマが握られていることに気づいたようだ。悲鳴を上げながら、走ってくる。

「おそい！」男がカマを振り回す、「くっ！」間一髪で剣先から逃れることはできた。

しかし、男は変幻自在の方法で、おれに向かってきた。

「なぜ、おれを襲う！」「……………」男は無言のままひたすら切りつけてくる。

「答える、お前は俺を殺す気か？」おれの問いに男は初めて答えた「ちがう……………」

わたしが欲するのは、お前ではない……………それよりも……………油断してはいけないと……………」男は言葉を区切り「言っただはずです！」一瞬の俺のすきを突き、男はカマで俺の肩を切りつけた。

「うう！」着物ごと右肩がバツサリ切られた、農作業用で小型の、しかも錆びたやつなのにこの切れ味ってありかよ。

「信仁をこれ以上いたぶるんじゃないわよ！」西枝の言葉に男は微笑した「嬢ちゃん、手出ししない方が身のためだよ、君に美しい顔に傷などつけたくないからね、だいたい、武器もない君がどうやって私と戦うのだね？」

「私には、これがある！」西枝はさっきの鉄の玉を取り出した、「……………」男は一瞬いぶかしげな表情をしたが、次の瞬間にはその顔を

恐怖にゆがめた。

「やめろ！！」叫ぶ男を無視して西枝は鉄の球を投げた。次の瞬間「うああああ！！」男の悲鳴が響く、というより俺の悲鳴も少し交じっている、

西枝が投げた鉄の球は空中で巨大な火の玉になったからだ、「ぐわあああ！！」火の玉は絶叫する男をまたたくまに飲み込み、そのまま地面に激突した。

「やり！！」グーサインをきめる西枝、あいつってホントあれでも女なのか？

「ていうか、男の僕が女の西枝に助けられるなんて・・・なんかな？」西枝、お前なのでそこで鉄の球を投げよと思ったんだ？」西枝は鼻を鳴らした

「パラレル様がわざわざ信仁に渡したんでしょう？絶対なんかあると思ったから投げたのよ。お守りの威力絶大よね、一撃必殺つていうか、瞬殺だもんね！さすがパラレル様。」

「・・・」たしかにパラレルという占い師はすごい、でもそれより重要なのはこの鉄の玉の正体だ、空中で突然火の玉となり、相手に襲いかかるって、まるで魔法だ。

しかもパラレルは幕屋を出る寸前に、このことを予想していたかのように、鉄の球を渡した。パラレルは人間じゃないんじゃないか・・・

そんなことを考えていると西枝にこつんと頭をたたかれた「いつまでぼくとしてののよ、早く図書館に行こう、行く予定だったでしょう、信仁が言い始めたんじゃない。」

西枝にせかされ、おれは図書館に向かってひた走った。

しかし走りながら、おれは不安を抱えていた、あの男・・・火に包まれた消えていった男がしたいとなつて発見されれば事件になる、いや火の玉に包まれて死体が燃え尽きたとしても、巨大な火の玉の後に残る、絶対明日あたり、町中大騒ぎになる、誰も西枝が鉄の球を投げているのを見ていなければいいが・・・

そんなことを考えながらも俺は走りつづけた。

「ふう、やっと着いた」俺も西枝も息が荒い、何しろ男に襲われた場所から2キロ近く

走りっぱなしだったから、肺が苦しくて仕方無い。

「とりあえず、休もう。一休みしてから調べようぜ。」「へばっている俺を西枝は憐れんだ目で見つめた「まったく、女子より体力がないなんて、やっぱり信仁、女……」「ちがう、ちがう、ちがう！！」さすがに女呼ばわりはされたくない、すぐさま飛び起きて中国語の辞書とアラブ文字の辞書（こんなのあったんだ！）を探し出し、鉄の玉の文字と比較してみた。

「ちがうわね？」西枝が首をかしげる、おれも同意見だった。やはり、中国語でも

アラブ文字でもない、未知の文字と考えるほかないようだ。

「帰ろうぜ」俺が出口に向かいかけた時「信仁！ちよつと来て。」西枝が嬉しそうな声を上げた「なんだよ」西枝は一冊の本を手に取っていた「ルーン文字と北欧神話？」その本の題名だ「ルーン文字に間違いはないわ、よく見てみなさいよ。」西枝に渡された本に載っているルーン文字と鉄の玉の文字を見比べてみる。「ホントだ……」たしかに鉄球の文字はルーン文字と同じだ。

「早速、暗号解読、開始！」西枝は乗り気で本と鉄球の文字を見比べながら『解読』を始めている。

「まったく……」そんな西枝を横目に見ながら俺は残りの鉄の球を見つめていた。

その時袋の中に一枚だけ紙が入っているのを見つけた「これは？……」その紙を手に取ってみると、そこにも謎の文字が……ルーン文字だろう、これも西枝に解読してもらうしかないな。

「信仁！一つ目の鉄の玉の解読ができた。」西枝は俺にノートの切

れ端を投げてよこした

「よし、なになに『大地よ怒れ、地の精ノームよ汝の怒りを今こそ示せ、地の表を槍の如く立たせたまえ、絶対唯一の主の名において』つてまるで魔法の呪文じゃん」

まさにこれは魔法の呪文だ、それ以外に考えられない。

「ああ、そうだ西枝、他の鉄球に取り掛かる前に、この紙の文字を解読してくれないか？」

西枝は嫌そうな顔をしながらも「わかった」といい作業に取り掛かった。

俺は西枝の解読が終わるまでの間に携帯を開いて、ニュースを見ることにした。

こんな時にニュースを見る必要もないと思うかもしれないが、もともと家族がニュースをよく見るせいで俺もニュースを見る癖が付いてしまったのだ。

「ここが、謎の焦げ跡が残る現場です！」ニュースを付けてとたん男性アナウンサーの緊迫した声が飛んできた。「ごらんのとおり、道路に巨大な円状の焦げ跡が付いています

付近の住民の話によると、男の悲鳴が聞こえたと思ったら、次の瞬間には振動があり

おそろおそろ窓から外を見ると、巨大場焦げ跡が地面についていたということですよ。

警察は何らかの事後があったと見た調べを進める方針ですが、今までにないタイプの

騒動に警察も頭を悩ませることになるそうです。「やっぱり、残ったんだ焦げ跡が・・・

そう思ったとき急に肩が痛み出した「そういえば、肩を切られてたんだっけ・・・」

走るのに夢中で肩の傷のことなんかすっかり忘れていたが、刃物で切られたのだ

痛まないはずがない、「いててて・・・」いったん自覚するとあつ

という間に痛みが増してきた。

「信仁、解読が……って血が！」西枝の悲鳴のような声が聞こえた、そして俺の意識は

西枝の声を聞いたと思っただら、すうつと遠のいていった。

「信仁……、起きて信仁……」かすかに西枝の声が聞こえた気がした、しかし気のせいかと思い、また深い暗闇の中に落ちていく。「おきて！おきなさい！おきる……！」

「うあ……！」西枝の怒鳴り声で俺の意識は現実に戻された。「西枝？……」

「信仁、目が覚めたんだね。よかった」西枝は安心した表情を見せた。「ここは？」

不思議そうな表情をする俺に西枝は笑いを抑えながら言った。

「ここは病院よ、あんた出血がひどくて、私が解読してる間に意識を失ったのよ。」

いそいで、119番呼んで近くの病院に搬送されたの、あんたの両親は医者の説明を聞いてる。「よく見渡してみるとたしかに病院の一室にいるようで、肩には包帯が巻かれている、「まったく、怪我したのなら教えてくれればいいのに。何も知らなかったからびつくりしたじゃない！」まあ、西枝の言うことももっともなんだが、「わるい、わるい。それはそれとして、あの紙には何が書かれていたんだ？」西枝は苦笑いしながらも紙を差し出した。「そこに解読結果が書かれてるわ。でも誰がこの紙を入れたんだらうな？」

なぜ西枝が首をかしげたのか、最初は俺には分からなかったが、紙を読み進めていくにしたがって、おれにもわかってきた。

「わが主、セレナ。貴方を守護するは我の役目、我が使役し200の精霊汝がために捧ぐ。汝の守護者ローラン」ローラン？人の名前だらうか、文面から察するにこのローランという人物は「セレナ」を守る立場の者の名前らしい。

「しかしな、あの鉄の玉の所有者がこの『ローラン』っていう奴だとしたら、なぜ、セレナは自分に命の危機が迫っていたのにその力

を遣わなかつたんだろうな？」

西枝も頷きながら言った「たしかに、普通の民間人である私や信仁にも扱えるんなら、

呪いをかけるほどの力を持っていた彼女なら簡単に扱うことができたのにな？」

つまり、死刑にされた『セレナ』はその運命から逃れるすべを持っていたにもかかわらず自ら滅びの運命を選んだということになる・

「……  
いったい彼女は どうして そんな選択をしたのだろうか？ どう考えてもわからない。」

「それはそれとして、信仁。あなたの家族への説明はどうすんのよ。あなたの親父、相当怒り狂っていたわよ。」親父が？不安そうな顔をした俺を見て吹き出しそうになりながらも西枝は続けた「あなたに対してじゃなくて、あなたの肩を切った犯人に対してよ。」

もうすごかったわ、『あいつから犯人の特徴を聞き次第、直ちに犯人を捕獲し半殺しにしてやる！！』って息巻いてたからね。」  
「おいおいおい……。」

「だいたい犯人を捕まえようにも、その犯人は西枝が「消滅」させてしまったし、凶器に使われたカマも巨大な火の玉により溶けて消え去ってしまった。つまりどう探しても犯人は見つからないってことだ。」

しかし、そんなこと親父に話せるわけがない。 どうやって説明すればいいんだ？

「おお、目が覚めたか！！」まずい、親父だ……

「今、医者からの説明を受けた。ナイフで切り付けられたんだってな。切りつけた奴の顔は覚えているか？」覚えているかといわれれば覚えているが、素直に話すわけにいかない「いや、何しろ急だったから、それに怖くてパニック状態だったもんで。」ああ、自分は虚言をしている……

「だから、お前は女と言われるんだ。男はパニックになどならず堂



はまずいじやるう？」「このおねえさん、いやパラレルは心を読めるのかよ・・・」「当たり前じゃ、私は大魔術師パラレルじゃぞ！」パラレルは半分怒ったような表情で言った。

「まあ、それはさておき。」パラレルは表情を引き締めた「本題に移ろうかの。」

パラレルは一枚の写真を出した「おおよその事情はつかめた。お前を襲ったのはこの男か？」パラレルが差し出した写真の男。間違いないあの時俺を襲った男・・・

「その険しい表情からして間違いないと見えるな。」パラレルは今度は紙を差し出した

「これは、なんですか？」受け取った西枝が訊ねる「お前の相方を襲った犯人についてのメモじゃ。その男についての詳細はそこに書かれているが、おおよそのことはわしから話そう。」パラレルは一呼吸置いて話し始めた「その男の名前は澤田鉄吉。職業は米農家、この近くの敷地に田を持っていてそこでコメを作りつつ、運送会社でトラック運転手も兼ねているタフな男だ。彼は昼の2時頃から連絡が取れなくなり警察に搜索願が出ておるが見つかつてはおらん。彼は新興宗教であるロゴス教に所属していた。その教えにより

お前を襲ったらしい。」普通の米農家の男と言われても信じられない、あの切り口、サビたカマでできたにもかかわらずズバツと切れた。あんなの米農家の平凡な男にできるだろうか。そもそも何でおれを狙ったんだ「いや、奴の本当の狙いはお前ではなかったらしい。」おれの心を読んだらしくパラレルはタイミング良く答える「本当の狙いは彼女だったようじゃ。」パラレルに指さされた西枝は困惑した表情を浮かべる「わ、わたし？」

「そうじゃ、おぬしじゃ。彼の真の狙いはお前だったようじゃ。」西枝が不安げに言う「どうして、私が狙いとわかったんですか。」パラレルは一枚の紙を差し出した

「そこに答えが書かれておる。」その紙には『ロゴス教団本部より澤田鉄吉へ。教祖ロゴスの名において西枝美紀を捕らえよ』と書か

れている。

「なんで、私を？・・・」戸惑う美紀にパラレルは諭すように話し始めた。「それは、ワシにもわからん。じゃが、一つだけわかったことがある。お主たちの力じゃ。」

俺たちの力？「そうじゃ。お主たちの力じゃ。お前たち2人とも強力な精神力を備えておることがわかった。その証拠にお前たちはあの男を破った。」「でも、あれはパラレル様がくれた鉄球のおかげ・・・」西枝がそれを言うのを予想していたかのようにパラレルは答えた。「いや、あの鉄球は私には扱えん。単に持っただけじゃ。あの紙を見なかったのか？」パラレルが指差す先にあるのは西枝が解読した紙・・・「それに書かれていたじゃろう。我が使役し20の精霊、汝がために捧ぐ」とな。あれを扱えるのはセレナの守護者であったローラン、あるいはセレナと同等の精神力を持ったものでなければ扱えぬ。あるいは、お主たち2人がセレナとローランであれば扱えるであろうが・・・」

パラレルは改めて、俺たちを見据えた。「残念ながら、真逆の存在だったようじゃ。」

真逆？・・・つまりセレナとローランの立場と逆にいる人物、ローランとセレナの敵というわけか！「その通り、あの占いの時にワシが驚いたわけがわかるか？お主たちの運命を調べたとき。2人とも先が見えなかったからじゃ。つまり予測不能・・・こんなことは普通の人間ならあり得ぬ。どんな人間でも運命は最初から組み込まれるはずじゃ。それが

ないということ、お主たちは運命に左右されず。時の流れにも影響されない特殊な人種であるといえる。つまり断言しておくがお主たちは人間ではないじゃろう。」

人間じゃない？！馬鹿な、俺はこの地球という惑星の日本という島国の中の一国民として平凡な家庭に生まれ、平凡な毎日を送ってきた、スポーツが下手で学力もそんなにない

高校生だぞ。人間じゃないってどうということだ？！

「お前さんたちが人間じゃないと言われても、いきなりすぎてわからんかもしれんな。」

よし、それなら証拠を見せてやる。」パラレルはゆっくりと左手をローブの中に入れ、次の瞬間には拳銃を握っていた!。

「なにするつもりですか!」西枝が悲鳴を上げる、「そうですよ、こんなところで銃をぶつ放そうって言うんですか!」パラレルはゆっくりと首を上下に振った。

「安心しろ、この銃の音はこの部屋だけにしか聞こえん。ワシ自身が精神力によつて、この部屋全体を防音壁のように覆つておるんじや。よつてこの部屋で起こる銃声は、外には響かん。」やつぱりパラレルは人間じゃない・・・。「その通り、ワシは人間ではない。いや、元人間だったかも知れんが、その記憶はない、たとえるなら人間の皮をかぶつた化け物みたいなものかの。」

「そこは、もう分りました!私が聞きたいのは・・・。」「パラレル様が本当に私たちを撃つか・・・ということじゃろう。」パラレルは心が読める。それは十分に分かっているんだが、改めて思い知らされる。

「もちろん撃つぞ、お前さんがた、私をずっと味方だと勘違いしておるがな、ワシは一言もお前さんがたの味方だとは言つておらんぞ?」まさか、じゃあパラレルは最初から

俺たちを殺るつもりで、近づいていたのか?・・・迂闊だった、このままじゃ

俺も西枝も・・・

「ジ・エンドじゃよ。」パラレルはニヤツと悪魔のような笑みを浮かべ、その手に握られたけん銃を俺たちに向ける「たとえば、お前さんたちが私と同じように『人間ではない』としても、精神力の使い方とも知らない未覚醒の状態であれば私に勝つことはできない。」

さあ、地獄への旅路にご案内・・・」パラレルの手に握られている拳銃が火を噴いた!

「西枝、早くこっちに！」病室のテレビ台の後ろに隠れる俺と西枝にパラレルは容赦なく銃撃を浴びせてくる。このままじゃ二〇秒とかならずテレビ台が破壊されて丸見えになる。

そのため、ドアから外に逃げ出そうとしたのだが『ビーン』という何とも奇妙な音とともに俺と西枝はドアに跳ね返されました。「ふふふ、無駄さ。言つたるこの部屋全体をワシの精神力で包んであると。お前たちは檻の中に閉じ込められた哀れな獲物なのさ。」笑いながらパラレルはさらに銃を撃ってくる。

「くそ、どうしたらいいの?!」西枝が叫ぶ。「西枝!あの袋は?鉄球の袋!」西枝はポケットを探る。「あつた!よしこれを使えば・・・」勝てるだけでも?」パラレルが嘲笑う。

「絶対に勝てる!だって私は使えたもん!」西枝は袋の中から取り出した鉄球をもち、投げる態勢に入った。

「ええい!!」西枝が思い切り投げた鉄球は空中でいくつもの鉄の槍へと変わった!

「ふん、そんな攻撃が私に聞くと思っているのかい。まあ、この技を使えるだけでもたいしたもんではあるがね。しかし私相手じゃ分が悪かったね。」

パラレルはローブの中に手を入れて拳銃をしまった・・・と思った次の瞬間にはパラレルの手には小さな本が握られていた。

「さあ、お前さんがたに私の精神力を見せてあげよう。」

パラレルは本を見ながら鉄の槍が飛んでいくわずかな時間の間に何かぶつぶつと呪文?のようなものを唱えた。

「全てのまやかしを無に帰せ!ゴットライジング!!」パラレルの両手を漆黒の渦が包んでいく。

「なによ、あれ・・・。」西枝と俺があっけにとられる中、黒い竜巻が一直線に空を飛ぶ槍に向かっていく。次の瞬間、鉄の槍を竜巻が包み、すさまじい騒音が鳴り響いた。

「そんな、ウソでしょう・・・。」西枝が声を震わせる。俺も声が出

ない。空中を飛んでいた槍は影も形もなくなっていた。

「これが格の違いつてもんさ。さあ、覚悟はできてるんだろっね。言っとくが今のお前さんたちでは私に勝つことは不可能だよ。」

俺は唇をかんだ。西枝の大技（といっても彼女自身の能力ではないが）も効かないんじゃない。もう、俺たちには反撃の手段がないのだ。

「さあ、2人仲良く、あの世に行きな。もっとも人間じゃないお前さんたちを神様が許すかどうかは知らないがね。すべてのマヤカシを無に帰せ、ゴットライジング！」

再びパラレルの両手が光り輝く。すさまじい光に視界が閉ざされる。ここでおれたちは死ぬんだ……。せめて、あと1年は行きたかった……。後一年で念願のアメリカへ行くことができたのに……。ってこんなときになにをくだらないことを考えているんだおれは……。ってまだ眩しいけどいつまでたっても騒音が来ない？

「そこまでしといたほうがいいぞパラレル。」部屋の入り口から声が……。ってこれって親父？……

「おまえ、まさか！」パラレルの声が引き付く「その、まさかさ。俺の大事な『光』を

消させるわけにはいかない。」「ふん、貴様に何ができる！」パラレルの手から光が再び飛び出す！「やれやれ、さっきの光を俺が消滅させたこともわからないのか？」親父が手をスツと空中に上げ光を切る動作をすると向かってきた光は空中で真つ二つになって消えた！

「なに！……」パラレルが困惑した表情を浮かべる。「前より弱くなってないか。パラレル。かつての力はどこに行った……。まあ、いい、今は片づけるほうが先だ。」

親父が懐からメモ帳？を出した。

「全能の神よ汝の拳を振りおろしたまえ、我が示すものを封じ込めたまえ！ゴットストーン！」

親父が叫ぶとともに突然、部屋の天井にぽっかりと穴が開いた……

と思ったとたん

そこから巨大な手がとびだし、そのままパラレルを押しつぶした！

・・・

「やれやれ、これで片付いたな。大丈夫だったか？信仁と美紀ちゃん。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0872n/>

---

パラレルワールド

2010年10月15日21時11分発行